



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町二の一

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 沖縄海賊

昭和40年2月5日 初版発行

検印廃止 ￥300

著者	笹 沢 左 保
	東京都港区芝西久保城山町6
発行者	神 吉 晴 夫
印刷者	堀 内 文 治 郎
	東京都千代田区神田三崎町2
	堀 内 印 刷

発行所 東京都文京区音羽町2 株式会社 光文社
振替 東京 115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。〔岩淵製本〕

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sao Sasazawa 1965

長編推理小説

おき なわ かい ぞく
沖縄海賊

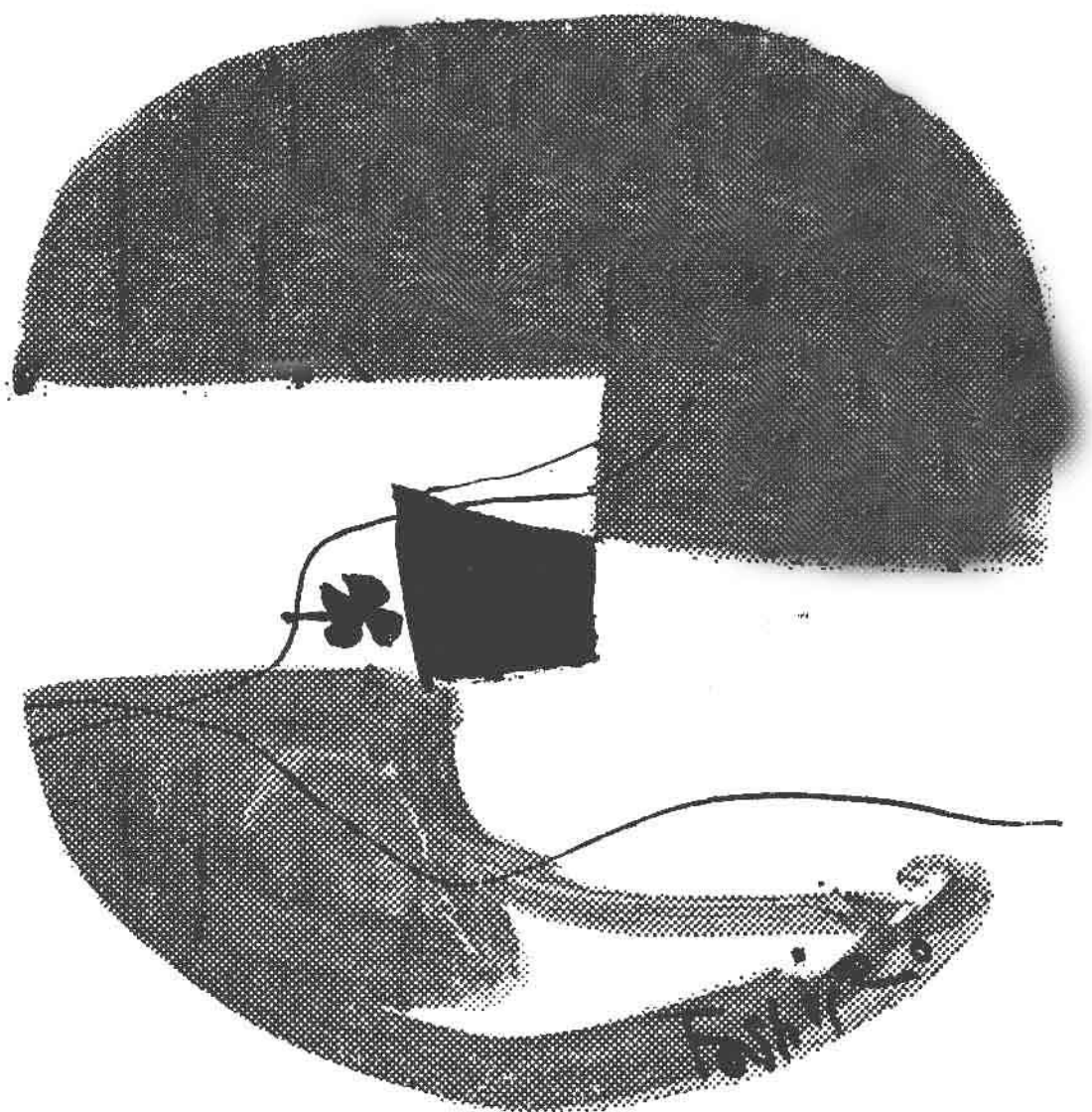
さき ざわ さ お
笹沢左保



カッパ・ノベルス

第四章	第三章	第二章	第一章	目次
海に哭く	海に潜む	海に挑む	海に消ゆ	

215 151 95 5



本文のイラスト

田^た
代^{しろ}

光^{ひかる}

第一章 海に消ゆ

I

南海は青い。部分的には、青いタイルに水を張ったような色もある。遠くは、緑がかった紺色に見える。波が、ゆったりとうねっている。波頭は、銀色だった。三月中旬であっても、日射しは真夏のそれである。

船が行く。航跡の白い波が戯^{たわむ}れている。船は、二、〇〇〇トンの貨物船であつた。紺碧^{こんぺき}の空に盛り上がった積乱雲を指して、貨物船は進んで行く。見渡す限り、海であつた。水平線に船影もなく、視界にあるのは茫漠^{ぼうばく}たる水の砂漠だけである。

突然、轟音^{ごうおん}が風と波の合唱を封じた。貨物船の中央部に、火柱が立った。碎けた船体の一部が舞い上がり、海に散った。船は傾いた。火を噴^ふいている。船首が鎌首^{かまくび}をもたげるように、高く浮き上がった。船尾から、海中へ吸い込まれていく。波が騒いだ。白く泡立ち、渦を巻く。

二、〇〇〇トンの船体が、まるでオモチャのように見える。中央部で二つに折れて、その間から煙と海水が溢れ出ている。半分以上も沈んだ。海へ飛び込む乗組員が、何か叫んだ。その姿は、海面に達する前に見えなくなったようである。

地鳴りのような音がして、渦の回転が早くなり、船首も海中に没した。やがて、渦は消えた。もとどおりの海に還った。だが、海面を重油が被い、船荷や船体の破片などを波が弄んでいところだけが違っていた。

何ごともなかったように、太陽が輝いていた。空も雲も、沈黙している。風と波が、ふたたび歌い始めた。

——ここで、草野周作はわれに還った。彼は慌てて、あたりを見回した。だが、草野周作の短い居眠りに気づいた者は、いないようだった。机の上に置いた右腕に額を当て、ほんの一、二分ウトウトしたらしい。背広の右袖が濡れていた。彼は、手の甲で口もとを拭った。

いやな夢を見た。色がついていただけに、夢の中の情景は鮮明だった。昨夜が遅かったから、疲れていたのに違いない。まもなく、退社時間のベルが鳴ると思ったとたんに、気が弛んだのだらう。

周囲が騒がしくなった。声高に私語が交わされている。どの事務机の上も、整頓が終わっていた。声に出した大きな欠伸が聞こえた。靴を磨いている者もいる。

草野周作は、壁の電気時計を見上げた。あと一分で五時である。残業の予定はない。誰もが、解放された気分でのいるのだ。

「今夜、付き合うやつは？」

「おう」

「銀座はごめんだぜ」

「参加者は六人なり。タクシーは一台では無理だな」

若やいだ声で、それぞれが勝手なことを言っている。遠慮なく声を張り上げられるのは、課長が席にいないせいもあった。課長は二十分ばかり前に呼び出されて席を離れたまま、まだ戻って来ていなかった。

海損部第二調査課の部屋にいて、黙っているのは入社して三日になる三人の新入社員と草野周作だけであった。草野周作は新入社員ではない。協信海上火災本社に勤務し始めてから、もう七年になる。海損業務に関するベテラン社員であった。

だが、草野周作は常に孤立していた。相手にされないのである。彼は、同僚たちから敬遠されていた。その理由は、草野自身にもわかっていて、彼が酒も煙草もやらないし、賭ごとくも嫌い、女にも興味を示さないためだった。

最初のうちは、草野周作も誘われた。その都度、彼は無愛想に断わった。やがて、誰も声をかけなくなった。声をかけなくなったことは、敵意に通ずる。草野周作は、好感を持たれない男になった。同僚たちは、彼を軽蔑した。そのうちに、彼は勤務時間中も同僚たちから無視されるようになった。

「三十二歳にもなって、結婚は愚か恋愛もしたことがないっていうのは、まさに国宝なみの希少価値

値だよ」

「点稼ぎだよ。マージャンをしたこともない真面目なサラリーマンさ」

「しかし、付き合いを知らない人間は、出世が遅いっていうぜ」

「セックスの処理は、どうしているんだろう」

「とにかく、貯め込んでいるんだ」

こうしたことを、聞こえよがしに言われた。だが、草野周作は腹を立てなかった。仕方がないと思っている。同僚たちにしても、悪口の一つも言わずにはいられないほどの、草野周作の徹底ぶりだったのである。

サラリーマンの世界では、付き合いというものが絶対であった。付き合いを知らない人間は、異端者なのだ。なぜ仲間と歩調を合わせないのか、その理由を探られて、あらぬ風評も立てられる。

草野周作も、別に理由があつて同僚たちに背を向けているわけではない。彼は、自分が客嚮家^{りんしやうか}だとは思っていなかった。金を貯めてもない。また、決して不具者でもなかった。酒と煙草は身体^{からだ}が受けつけないし、賭^かごとは面倒であつた。好きな女と出会わないから、恋もしない。結婚する気も起こらなかった。

あまり、人と喋^{しゃべ}ることが好きではない。静かな場所にいたかつた。ただ、それだけの理由なのである。だから、彼は中学生のころから友だちというものを持つたことがない。性格である以上、どうにもならなかつた。

同僚たちは、賑^{にぎ}やかに今夜の計画を進めている。もう、彼らは草野周作の存在を意識していなか

った。悪口も言わなくなった代わりに、草野そのものを忘れきってしまったのだ。そう思うと、慣れている草野にしてもさすがに寂しかった。彼は正面の壁に貼りつけてある二メートル四方の大きな世界地図に目を向けた。地図には全世界を結んでいる航路が、赤い線で描かれていた。

草野は、弟のことを想った。孤独を意識した時は、肉親のことを思い出すものなのかもしれない。それに、先刻の夢のこともある。弟が乗っている船は、どのあたりまで行っただろうか、草野は神戸から太平洋を南へのびている赤い線を目で追った。まだ、台湾の近海のあたりに違いなかった。

弟の義孝は、内外海運所属の普通貨物船『第一内外丸』の機関長であった。内外海運は協信海上火災とも取り引きがあるが、船会社としては三流で持ち船も少なかった。『第一内外丸』は二、〇〇〇トンだが、それでも内外海運所属の貨物船の中では最大だという。その『第一内外丸』の機関長だというのが、義孝の自慢でもあった。

義孝は一カ月前の二月中旬に結婚した。結婚後、初の航海である。新婚早々、二十日間の別れだが、義孝は張り切って家を出て行った。妻の雅江も、不満顔は見せなかった。海の男と結婚した以上、最初から諦めていたのだろう。

『第一内外丸』は、タイのバンコクへ向かっている。積荷は鉄合金のワイヤが二、〇〇〇トンであった。荷主は『パークス・トレーディング・コーポレーション』のトーマス・パークス氏というところになっている。船も積荷も、協信海上火災が保険者である。これらのことを、草野は義孝から聞いて知っていた。

五時になった。ベルが廊下に鳴り響いた。同僚たちが、一斉に立ち上がった。すでに笑っている顔が幾つもあった。彼らはオシャレであった。三月も半ばをすぎたとは言え、まだ肌寒い陽気である。だが、彼らはコートの類を用いなかった。窓際の幅広いハンガー・ボードには、草野のダスター・コートだけがポツンと吊つてあった。

草野も腰を上げた。この時、課長が部屋へ戻って来た。急ぎ足であった。課長は自分の席まで行ったが、椅子にすわろうとはしなかった。緊張した面持ちだった。貨物船の船長の経験があるという色の浅黒い顔が、厳しく引き締まっていた。何かあったのに違いないと、草野は悪い予感に捉われた。

「みんな、集まってくれ」

あまり広くない事務室内に、広瀬課長の塩辛声が散った。一瞬にして、部屋の中は静かになった。課長席を振り返った課員たちの顔から笑いが消えた。それから、課員たちは課長席へ向かつて、緩慢に足を運び始めた。まるで、刑罰の宣告を受けに行く罪人のような足どりだった。

「悪い知らせだ」

と、課長は部下たちの顔を見回した。

「内外海運の『第一内外丸』が遭難したらしいという連絡が、内外海運本社からはいった」

広瀬課長は、抑揚のない語調で言った。草野の喉が鳴った。とっさには、信じられない課長の言葉だった。何かの間違いだ、彼は勝手に否定していた。夢の続きだとも思った。

同僚たちは、それぞれ神妙な顔つきで頷いていた。特に、驚いたりはいしない。船舶や積荷に事故

があつた場合、保険金を支払うのが妥当かどうか、調査するのが彼らの仕事なのだ。貨物船だけを
受け持っている第二調査課へ、貨物船が遭難したという知らせがもたらされるのは、当然のこと
であつた。

仕事であつて、彼ら自身の不幸ではない。感情には、関係がないはずだった。しかし、草野の場
合だけは違っている。『第一内外丸』には、ただ一人の肉親が乗っているのだ。そのことは、課長
も同僚も知っていなかった。誰も驚かないのは、当たり前だった。

「現在、鹿児島島の第十管区海上保安本部に詳細を問い合わせ中だが、今日の午前二時ごろ、『第一
内外丸』は漂流物を発見したと発信、そのまま消息を絶った。その発信位置は北緯二十四度二十九
分、東経百二十六度五十六分、と伝えて来たそう^だ。沖繩本島の南方約二百五十キロ、宮古島^{みやこしま}の東
南約百八十キロのあたりと思われる。太平洋の琉球^{りゅうきゅう}海溝^{かいこう}の洋上だ」
と、広瀬課長は掌^ての中の紙片に目を落^おとしながら説明した。

「原因は？」

草野の背後で、そう質問があつた。

「今のところ、不明だ」

課長は、首を振った。

「見当もついていないんですか？」

同じ質問者が訊いた。

「今日の沖縄近海は天候快晴、風波も普通、もちろん、台風や突風が船を沈没させたとは思えな

い。最深七、〇〇〇メートルもある琉球海溝を航行中に、浅瀬や暗礁に乗り上げるといふことも、またあり得ない。問題は、発見したという漂流物だ」

「漂流物を発見したからって、遭難はしないでしよう。船自体の事故が原因ということになりませんか」

「いや、危険な漂流物もある。発信した直後に消息を絶ったという点から推して、爆発事故とも考えられる」

「積荷は？」

「鉄合金のワイヤが二、〇〇〇トンだ。トン当たり二十万円の商品価値だから、運賃を含めて四億五千万円に近い保険金になる」

「鉄合金のワイヤでは、爆発や自然発火する積荷じゃありませんね」

「浮遊機雷にでも、触れたのかもしれない」

「乗組員は？」

「船長以下二十人。ほかに、船客が三人いたという」

この課長の言葉に、草野は胸の筋肉を引きちぎられるような鋭い痛みを覚えた。乗組員の話が出たからだろう。二十人の乗組員の中には、弟が含まれている——と、草野は肉親の生死を念頭に刻んだのだった。

にわかに、膝頭が震え始めた。少年のころの義孝の笑顔が目には浮かび、三、四日前の弟の声が耳の奥で聞こえた。氷に押しつけたように顔は冷たかったが、頭の芯は熱かった。草野は唇を噛み、

目を閉じた。

課長席の電話が鳴った。ヒステリックなベルの音だった。草野は、背中をどやしつけられたように目を開いた。誰もが、課長の手にある送受器へ食い入るような目を向けていた。課長は、ただ頷うなずいているだけである。

『第一内外丸』の遭難に関する電話であることは、課長の顔を見て一目で知れた。眉間みけんに皺しわを刻んでいる。四十六だという広瀬課長が、ひどく老やけて見えた。半ば諦めながら、草野は決定的な知らせでないことを祈っていた。この時の草野は、保険会社の調査課員ではなく、肉親の安否を気づかう孤独な男であった。

課長は電話を切った。だが、置いた送受器から手を放そうとしなかった。

「第十管区海上保安本部から、その後の状況について連絡があったそうだ」

誰にともなく言って、課長は緩ゆるやかに首を左右に動かした。だめだと言いたげな、首の振り方だった。草野は、ふたたび目を閉じた。吸い込まれるように、後ろへ倒れそうな気がした。

「『第一内外丸』は、絶望だよ。遭難沈没は、確定的だそうだ。今朝、現場付近に到着して搜索に当たっていた二隻の貨物船が、消息を絶ったあたりの海上で、海面のかなりの面積を被おおっている重油を見つけた。A重油だそうだ。それから、広範囲にわたって飛び散っている船体の破片や一部、木製のハッチ・カバーなども発見されている」

課長は天井を見上げて、朗読口調で続けた。

「乗組員も絶望ですか？」

草野は、同僚たちを押しのけるようにして前へ出た。その剣幕に、目を見はった者もいた。課長も、怪訝そうに眉をひそめた。草野の尋常でない表情に気づいたのだろう。

「どうかしたのかね。顔色が悪いじゃないか」

「弟が、『第一内外丸』の機関長なんです」

「え……？」

草野がなんの思い入れもなく言葉を口にしたので、課長の驚きはあっさり強かったようである。同僚の顔も、揃って草野へ向けられていた。彼らは黙っていた。同情の沈黙であった。課長も、目を伏せていた。それは、乗組員の一人も救助されていないということの意味していた。

「気の毒だが……」

と、課長は思いきったように顔を上げた。

「生存者がいるとは考えられない。『第一内外丸』と記された救命ボートが、二隻見つかったそう。二隻とも、破損していたという。一隻は半分沈みかけていて、誰も乗っていないかった。もう一隻には、死体が二つあった。服装などから察して、三人の乗客のうちの二人らしい。溺死体だというから、ボートにかじりついているうちに力尽きたのだろう」

「だから、絶望なんですか？」

怒ったような口調で、草野は言った。

「消息を絶ってから十五時間以上、救助船が搜索を始めてから約十時間たっている。沿岸で遭難したわけではない。どこかに泳ぎつくというのも不可能だ。救命ボートは二隻だけだろう。その二隻

